

2011年、東日本大震災の年に、図書館はどのように描かれたか

映像メディアとコミック・文芸作品に登場した図書館・図書館員に関する事例研究

文学部日本語日本文化学科 教授

佐藤 毅彦

1. はじめに

2011年3月11日、東日本大震災により、広い範囲の地域で、大規模な災害が発生した。

この状況下で、詩人の和合亮一は、ツイッターでの発信を続け、のちに『詩の礫』というタイトルで単行書として刊行された内容は、大きな反響をよんだ。¹⁾その中に「某月某日。図書館の本は散乱して、本棚は斜めに傾いている。それを一つ一つ本棚に入れる。書物も瓦礫になるのだ」と記述している部分がある。震災による図書館の被災状況については、各種のマスコミや図書館関係雑誌でも多くのページが割かれ、報道されたが、このツイッターを通じて投げられたことばのつらなりは、現場の雰囲気を生々しく伝えている。

東日本大震災のあった年として、人々の記憶に残るであろう2011年に、主に文芸関係とその周辺の領域で、図書館はどのように言及されたのか。この数年間、インターネットの普及や、公共図書館の設置主体である地方自治体の財政状況が悪化していると報じられる一方で、2010年は「電子書籍元年」といわれ、図書館サービスやそれを提供する施設としての図書館の状況も変化しようとしている中で、メディアにおける図書館の取りあげられ方の具体的な状況について、事例に基づいて検討した。

2. 映像メディア

2-1. 映画『コクリコ坂から』

「スタジオジブリ」の、宮崎駿：企画、宮崎吾朗：監督、による、映画『コクリコ坂から』が、2011年7月に公開された。原作のコミックは、月刊誌『なかよし』講談社、1980年1月号～8月号に連載され、単行本化されていたが、映画の公開に合わせ、角川書店より新装版が刊行されている。¹⁾

原作のコミックでは、「ママ……あたしちょっと学校の図書室に行ってくるわね」というせりふに続くページで、女子学生が、学校の図書室の書架で、「これにもない」「あった！」と、図書についている「貸出カード」(ブックカード)を次々に調べ、「風間さんが読んだ本 風間さんが……」と意中の人物が過去に借りたことのある本を2冊借り出すシーンが描かれている(pp.239-244)。映画は、コミックの登場人物やストーリーの枠組みを取り入れているだけで、細部にわたって、原作が再現されているわけではなく、このようなシーンもない。²⁾

映画と原作の違いについて、山口真也は、映画『コクリコ坂から』では、学校図書館のエピソードが削除されていることを指摘し、同じくスタジオジブリ作品であった、『耳をす

ませば』について、「製作段階で日本図書館協会や学校図書館問題研究会が」「貸出方式の問題点（ブックカードから情報が漏洩するという問題）を指摘し、改善を申し入れた」ことを紹介している。3)

2-2. テレビドラマ『破婚の条件』

2011年8月26日（金）21:00～22:52に、フジテレビ系列で、森村誠一サスペンス『破婚の条件』が放映された。ヒロインは図書館に勤めている女性だが、正規職員ではなく、「パートの司書」、という設定で、ドラマの冒頭で、同僚の女性ふたりが「だってショックですよ。正規職員っていうのは、みんなあんなにもらってるなんて」「いまさら、何いってんのよ。司書なんてきこえはいいけど、結局あたしたちはパートの職員じゃない」「だけど手取り10万じゃ、暮らしていけません」という会話をしている。4)

2-3. テレビドラマ『ストロベリーナイト』

2012年になって、フジテレビ系列で1月31日に放映された、連続ドラマ『ストロベリーナイト』シリーズの「過ぎた正義（前編）」で、殺人ではないかと思われる事件で捜査を担当している警視庁職員の話で、吾妻（監禁殺害事件の犯人だったが、精神鑑定の結果、心神喪失を理由に裁判で無罪とされた人物の名前。乗用車に撥ねられて死亡）という人物について、「吾妻ですが、事件から逮捕されるまで、ひんぱんに、図書館に通っていたことがわかりました」「何しに？」「はい、これが、吾妻が、検索した図書の一覧です」（書名の一覧リストを差し出す）「吾妻照夫」の名前、「借りている資料」として、精神疾患や精神鑑定に関係する図書：約25点の「書名」や「出版社」などが記されたリストをみて、「吾妻が、精神疾患についての知識を得たがったのは・・・」「心神喪失状態を演じるため」「裁判官や司法精神鑑定をした精神分析医が、吾妻がこういう勉強をしたのを知っていたなら、無罪には、ならなかったでしょう」というやりとりがあった。5)なお、せりふでは「検索」と言っているが、画面に映し出されるリストには、「中野区立新井図書館貸出リスト一覧」と表示されている。6)ドラマの後半部では、同じ職員が、殺人の容疑者と思われる元刑事の写真を入手し、「吾妻が通っていた図書館に行ってみたんす。司書は、この倉田（元刑事の名前）が、吾妻のことを調べに来たと証言しました」と発言している。

『ストロベリーナイト』は、菅田哲也の小説をドラマ化した作品であるが、「過ぎた正義」の原作（『シンメトリー』、光文社文庫、に収録）では、息子が事件を起こして、警察を退職した人物（倉田）が、過去に自分が関係した事件の犯人（吾妻）のその後の行動について、『『デカの真似事みたいなことを始めた』『大きな情報を掴んだ。奴は事件が発覚してから逮捕されるまでの八ヶ月間、わざわざ隣の区の図書館に通って、精神疾患の勉強をしていたんだ』（p.88）と、ヒロインの警視庁職員に述懐している場面がある。

警察の捜査員や、警察を退職した人物が、事件に関係していると思われる人物の「図書館利用記録」を、図書館に出向いて入手しているというストーリーで、ドラマではさらに、警察を退職した人物の行動について、警視庁職員が図書館に出向いて、司書の証言を聞きだしている。なお、webでは、このドラマに関して、図書館でのプライバシーの扱いにつ

いて、問題を指摘する見解もみられた。7)

3. コミック

3-1. 『夜明けの図書館』

3-1-1. 『夜明けの図書館』の概要

コミック雑誌『JOUR すてきな主婦たち』に掲載(2010.12 2011.3 2011.7 2011.9)され、2011年10月に、単行本が刊行された、埜納タオ『夜明けの図書館』は、その帯に「その疑問、新米司書がお手伝いします」「利用者の調べものをサポートする『レファレンス・サービス』。難問・奇問の裏に隠された真実とは…!？」と書かれており、うら表紙がわの帯には、「市立図書館で働く新米司書・ひなこ。日々利用者から投げかけられる疑問は、迷宮入りしそうな難問ばかりで…!？『調べもの』を通して、本と、人と、心を繋ぐ。ほんのりあったか、図書館マンガの誕生です！」という記述があるように、暁月市立(架空の地名)図書館の若い女性職員を中心人物として、その勤務する図書館での日常をあつかったストーリーである。1)

刊行後まもなく、神戸新聞「ひょうご選書」ページ掲載の「ブックサイト」で「マンガ研究者・ヤマダトモコ」がとりあげ、「司書の役割や図書館の現状を知らない大勢の人に読んでほしい、誠実な作品だ」と紹介した。2)また、NPO法人「図書館の学校」が刊行している雑誌『あうる』の書評では、松本雅貴(市川市立図書館館長)が、「図書館司書にとって基本を確認できる納得の一冊」と評している。3)さらに、国立国会図書館がだしている「カレントアウェアネス」には、著者のインタビューが掲載されるなど、図書館界でも話題となっている。4)

3-1-2. 図書館の職員

導入部分(pp.9-12)で、次のように紹介される。

○葵ひなこ(25)三年の就職浪人の末、司書として、「暁月市立図書館」に採用される。

○大野正人(27)庶務経理担当の男性。

○石森さん(35)情報サービス担当の女性。職員の担当配置を通告するなど、職場のリーダー的な存在。

○小桜さん(24)女性。ひな子は「一番年が近いから仲良くなりたいけど」「できるオーラに気後れ」を感じている。

○臨時職員さんたち 9ページ中段のコマで描かれているのは4名(このあとの場面では、ほとんどふれられることはない)。

大野は、「市役所の一般行政職員」で、図書館は「今年で3年目」(pp.93-94)、司書資格はないが、電灯の交換や除籍処理以外に、カウンタ業務や利用者のクレーム処理もこなしており(p.97)、ひな子とともにレファレンス業務についているシーンもある。また、ひな子の受けた質問に、本人も含め、石森・小桜・大野の職員がサービス残業で対応していることであらわれているように、図書館の仕事に対して、一定のモチベーションが維持され

ている職場だといえよう。

3-1-3. 図書館サービス：レファレンスサービスを中心に

「みなさんはレファレンスというサービスをご存知でしょうか？ 利用者の“知りたい”を調査・お手伝いする仕事で 図書館において、重要な業務なのです」(p.11) という一節が冒頭部分にあり、毎回、図書館に持ち込まれる質問に、ヒロインの女性職員（葵ひな子）をはじめとするスタッフが回答していくのが、ストーリーの中心になっている。

第1話では、子どもの頃この街に住んでいた高齢の男性が、郵便局舎があった付近の1930年代の写真をみたいという。男性は、当時、郵便配達員との交流があり、写真は、大きな写真賞をとったカメラマンの写真集にのっていたという。閉館後も、ひな子は、書庫で資料にあたるが、発見できず、他の職員（石森・小桜・大野）に協力を依頼する。写真家を手がかりに、図書館に所蔵されていた写真集から、該当のものと思われる写真を発見する。四人の職員の中で、一番年上の石森さんは「レファレンスって発見の連続なのよね。何年やっても」「どんな内容であれ真摯に受けとめて一緒に学ぶ姿勢が大切」と語っている。

第2話では、50歳の女性が、物置で亡父の手紙を発見し、解読するためくずし字を調べる本を探す。ひな子は、『くずし字の辞典』を紹介し、「基本的な調べ方は最初につけるようせよ」と説明する。利用者の女性が「司書の女の子も親切で」と家族に話しているシーンがある。その後、女性は父親の投稿した短歌を調べたいと来館し、ひな子は、大野とともに、この女性が生まれた50年前の新聞を縮刷版で調べ、その短歌を新聞の投句欄で発見する。その句は、「還暦」の意味から娘にあてたものであると推測できることを、ひな子はこの女性に伝える。

第3話では、ランドセルを背負った男子小学生が「自分の影が光るのをみたことがある」と友人に話すと、「嘘つき」と言われたのが悔しく「絶対証明したい」と図書館にやってくる。話しかけられた大野は、ひな子といっしょに、自然科学の書架で、「煙で周りが白くなって」「光がいろんな色にみえて」などの男の子の発言をもとに、『気象図鑑 ふしぎ』などの本を調べ、「ブロッケン現象」と判明する。さらに児童書コーナーの図書でも確認でき、大野は、同じ児童書の書架にあった本を手で「こっちは本では“虹の仲間”で紹介してるぞ。ここには虹の作り方が」と男の子に伝える。ひな子は「名称がわからなかったのに」「よく見つけられましたね」というと、大野は「名称がわかってたらそれを調べるだけで虹の作り方まではわからなかった」と答える。

この回には、図書館の一般行政職員：大野、と、同期入庁の男性：園田（「企画部企画課経営政策総合計画担当」で「企業誘致のプロジェクト」担当している人物）が、資料集めに来館するが、校外学習の小学生にじゃまされて目的が果たせず、のちに、電話で「F社の過去10年間の業績、財務状況、従業員数の推移」を2・3日中に調べてほしいと、大野に依頼し、「こっちは大事な仕事なんだよ」という。ストーリーの後半で園田が来館し、大野が「産業統計調査の過去のデータまとめておいた」というと、「助かる」「仕事早い」といった後、「この手腕、早く戻って本庁で発揮しろよな」という。この回のラストシーンで大野

は、園田に、「虹の作り方知ってるか？ 俺、図書館（ここ）が嫌いじゃない」とつぶやく。

第4話では、大学1年生の女性が、「図書館の近くにある橋を、満月の夜に渡る時は決して振り返ってはならない、大切な人が消えてしまう」という都市伝説について、ネットには確かな情報がないので、図書館なら真相・元ネタがわかるかと思って、調べにやってくる。女子学生は思いを寄せる先輩が留学中でコミュニケーションがとれず、不安定な精神状態になっている。ひな子は、郷土資料コーナーで、地元につまわる伝承の関係の図書館の「目次」から探し出す。さらに、内容は、口承によって変形するので、より原型に近いものをあたり、民俗学の書架を調べる。女子学生は留学中の先輩に、電話してみるが、思いが伝わらない。その後、再度、来館した女子学生に、ひな子は、大野とともに、寄贈された資料の中から『暁月今昔譚』（昭和10年発行）を発見して、詳しい内容を確認し、女子学生は再度、先輩に電話をかけて、関係の回復がはかられる。

『夜明けの図書館』では、図書館が従来から扱ってきたような、文学や国語以外の領域で、高齢男性の昔の思いに関連のある写真、子どもの関心のある自然現象、などが質問内容に含まれている。レファレンスサービスの質問者となっているのは、高齢の男性、50歳の女性、男子小学生、大学1年の女性、といった人たちで、ほかに、行政職員が自らの仕事に関連して、企業に関する情報を求めてくるケースがある。

このコミックと同様、「N市立図書館」でのレファレンスサービスをあつかったストーリーで、季刊誌『ジャーロ』には「レファレンス・カウンターの難問」というタイトルで連載、後に、単行本『おさがしの本は・・・』として刊行された、門井慶喜の小説がある。5)

そのストーリーで、質問者と、質問内容は以下のようになっていた。

①女子短大生—林森太郎『日本文学史』（pp8-9）。

②分館の利用者だった六十前後の紳士—「赤い富士山」が表紙にある本（pp.50-51）。

③N市立図書館の副館長として、市長秘書室から転属した喜多田直次（単行本では鴻田直次）（p.99）—「或る一つの語をタイトルに含む本。その語は、A 意味的には、日本語における外来語の輸入の歴史をまるごと含む。 B 音声的には、人間の子供が最初に発音する音によってのみ構成される」（pp.103-104）。

④小さなお婆さん—爺さんが、図書館の本を、返却しないまま、亡くなった（pp.151-152）。爺さんは『早川図書が、どうのこうのと』いっていた（p.156）。

N市市会議員の増川弘造 6)—図書館の存続について、市議会の文教常任委員会で発言する内容（pp.202-204）。

⑤N市市会議員の増川弘造—前回から引き続いて、市議会の文教常任委員会での発言内容
同じく増川弘造—学生のころ読んだもので、石原慎太郎『太陽の季節』（昭和三十一年・芥川賞受賞）にあるエピソードと類似のシーンがある小説（pp.217-224）

坂本経成 N市市長—和久山が文教常任委員会で、図書館の存続について発言した際に、参照したと思われる書籍のリスト（pp280-282）。→和久山は『私はあれを書くために、ただの一冊も本の助けを借りていません』『書物というのは、ただ人間を助けるだけの存在

なのです。最終的な問題の解決はあくまでも人間自身がおこなわなければならない』(pp.282-283) と回答している。

『おさがしの本は・・・』では、文学・文学関係者と本に関する質問に、図書館員が回答する内容が毎回の主題となっている。後半には、図書館の存続について、図書館員である和久山が市議会の文教常任委員会で参考人として発言する、図書館へ来館して質問した市長に対応する(ただし質問内容に該当する図書は、存在しないと回答)、という「行政支援」「地方議会議員の活動支援」にあたる内容が含まれている。

質問しているのは、研修課題をだす副館長、文教常任委員会で参考人として発言することを要請し、あわせて、過去に読んだ小説探しを依頼する市議会議員、市長、といった、行政・議会関係者を別にすると、女子短大生、六十前後の紳士、お婆さん、という人たちである。

小説とコミックの限られた事例であり、『夜明けの図書館』は、さらなる連載も予定されているので、7)他の質問者や質問内容が扱われる可能性はあるが、たとえば、利用者の属性として「中・高校生」「男子大学生」「会社員」「自営業者」などは、レファレンスサービスの質問者として、ここでとりあげた作品には登場していない。文部科学省がとりまとめた『これからの図書館像』(2006)では、「課題解決支援サービス」として「行政支援」などとともに、「ビジネス支援サービス」をあげている。8)フィクションの作品としてあつかう際には、図書館とおなじ行政機関の関係者に対しての「行政支援」のほうが、「ビジネス支援」サービスよりも、ストーリー化しやすい、ということか。

3-2 『図書館の主(あるじ)』

篠原ウミハル『図書館の主』は、週刊コミック雑誌『週刊漫画TIMES』に掲載され、芳文社から単行本が、2012年2月時点で1~2巻、刊行されている。9)帯には、「大人が児童書を読むのは気恥ずかしいけど何故か心地良い・・・」「児童書のソムリエ・御子柴が贈る癒やしの物語」「私たち図書館司書が愛情をもってあなたにピッタリの一冊をお探しいたします」と記載されているように、児童書を蔵書とし、公園の一角にある「タチアオイ児童図書館」(1巻 p.6)という、「私設図書館」(1巻 p.10)のできごとが描かれている。

ストーリーの中心人物である、御子柴は、20代と思われる男性だが、10)司書をめざすきっかけとなった、子ども時代に利用した地元の図書館の男性職員との交流が(「幸福の王子前・後編」1巻 pp.43-82)描かれている。その市立図書館は「建物の老朽化が進んだ」「蔵書もほとんどないちっぽけな所」だったが、そこに「仏頂面をした年配の司書」で「名前を徳間」という人物がいたことが紹介される。11)「口を開けば説教ばかりのこの司書を皆が避けているように見えた」(pp.56-57)この人物に、御子柴少年は、声をかけられ、本を紹介される。閲覧席の机に荷物を置いて、席を離れていた学生がもどってきて「荷物あるってことは、席とってるってことだろ」というと、徳間は、「ここは自習室じゃない。図書館だ」「ここの本を読みもせず使いもせん奴らが席とりしてもいい、試験勉強の場所じゃないんだよ」(p.59)と発言し、館内がざわつく。

御子柴は、司書に関心をもち、どうやったらなれるか尋ねる。徳間は、大学にいて、司書課程で資格は取れるが、問題はそこからで、「なかなか司書の空きは」ない、「職につくのは大変」「最近民間委託の所も増えてきて、司書資格がなくても図書館員には、なれちゃう」(pp. 68-69) といったように、司書資格と、司書として職につくことの関係性について、説明している。徳間は、「もともと市役所勤め」で「司書資格持ってるからって転属してきた、司書には「なればいいくらいには思ってた」「配属が決まった時は嬉しかった」「いい本を一冊でも多く、図書館に来る人に渡す、やりがいのある仕事だよ」(p.70) と述べている。この図書館が、改装して、新図書館ができることになり、「市役所から新しい館長」が来る。「私はあんまり利用したことがなくて」「やっぱり左遷みたいなもんか」などと発言するこの人物に、女性職員は「館長になる人がそんな態度でどうするんですか」(pp.73-74) とことばをなげつける。館長は「図書館なんて本さえあればいいだろう」「本を並べたりするのなんてバイトでもできる。専門職の必要なって感じない」というが、子ども時代の御子柴は、「本を読んでほしいと思うのが、読みたい本を探してくれるのが司書だろう」「あんたのいってるのは図書館じゃない、ただの本が入ってる箱だ」(pp.75-76) といい返している。

御子柴がこの児童図書館で働くことになった経緯については、1巻の最終話（「タチアオイの花咲く頃（前・後編）」1巻 pp.147-188）で明かされる。3年前、御子柴は「新米の司書」として働いていた市立図書館で、子供用の机に居座る利用者を注意したことで、管理職に叱責されていた (pp.164-165)。12)その図書館のカウンターで、職員に、レファレンスの回答内容や予約した本がまわってこないことについて、クレームをつけている女性 (pp.168-170) がいた。これが児童図書館のオーナー小手川葵（「不動産を中心にデベロッパーとしても手を広げてる一流企業」の会長で「総資産は数百億といわれてる」(p.154) 女性) であった。

「求められる本を提供するのが司書の仕事ですから」という御子柴に「私のために、おすすめの本を」選んでほしい、とオーナーはいい、御子柴は、担当である児童書のおすすめの本を紹介する (pp.173-174)。後日、御子柴は、また、管理職に叱責されているところをオーナーにみられる。「いつものことなんです」「あの館長は役所から来た人で、本のことなんか知らないし、知ろうともしません」という御子柴 (pp.178-179)。さらに「世の中にどんないい本がたくさんあっても手に取れる場所がないと意味がない」「ぼくの手だけじゃ届けられもしない」「そんな理想は図書館には不要なのかもしれませんけど」という御子柴に、オーナーは「私のために図書館を作らない？これからも私のために本を選んで、その本を管理して、あなたの理想の図書館を作ってみない？」(pp.183-184) と提案し、御子柴は、児童図書館で働くことになる。

絵本作家志望の若い書店員が児童図書館にやってきて（「書店と図書館」2巻 pp.25-48）「どっちが児童書の知識があるか！勝負しろ」(p.34) といっている場面もある。書店員は、「図書館があるから、本屋の売り上げが落ちるんじゃないか」「タダで借りて」「売れなく

なると」「出版点数もおさえられ」「本屋に並ぶのはベストセラーばかり」「売る目的の本しか作られなくなるかも」「図書館が本を潰しちまう」(pp.36-37) というが、別の先輩書店員は「図書館」「は本屋にとって大事なお客さん」「店頭では売れないような本でも、必要とする人がいるなら買ってくれる」(p.39) といい、御子柴は、図書館からの貸出について、貸し出し期間が 2 週間でだから、一冊の本を、一年間で貸し出せるのは 26 人前後であり、「一般書と児童書の違いもあるし、複本の関係で地域差はあるが」「図書館で本を借りられる人数には限りがある」(p.40)「図書館ってのは、自分で本を買って読むきっかけを与えてくれる所なんだ」(p.43) と語っている。

児童書を専門とする御子柴が、本についての質問に回答するストーリーもある（「少年の日」2 巻 pp.69-88）。戦時中に子どもだった、現在は高齢の男性から、「探している本が何なのかわからない」(p.75) という話を持ちこまれる。『少年倶楽部』に連載「悪と戦う冒険活劇」「主人公の少年が実はインカ帝国の末裔」などをきいて、御子柴は、「高垣眸『豹（ジャガー）の目』」をすぐに書架から取り出して手渡す (pp.83-84)。そのシーンを目撃していた、女性職員から、質問をうける回もある（「貝の火 前・後編」2 巻 pp.109-148）。内容を聞いただけで、本のタイトルをあてるのは、どんな本でも、司書の資格をもってる人ではできるのか、ときかれた、御子柴は「レファレンスってのはそんなもんだ。今は調べる方法もいろいろあるから」とこたえる。そして、ウサギが主人公、そのウサギが宝物を手に入れる、周りの動物に尊敬されるが、最後はその宝がこわれてウサギが失明しちゃう話、ときいて、「宮沢賢治『貝の火』」だ (pp.112-113) と即答する。

メインストーリーは「タチアオイ児童図書館」(1 巻 p.6) という、「私設図書館」(1 巻 p.10) でのできごとをあつかっており、児童文学作品のストーリーが紹介される回もあるが、御子柴が司書をめざすきっかけになったのは、地元の市立図書館の職員「徳間」との出会いであり、また、御子柴自身も、市立図書館で新米の司書として働いているところで、現在の児童図書館のオーナーと出会っており、現在の公共図書館の状況・職員体制・職員の意識、書店と図書館との関係、などをあつかったストーリーが描かれている。

4. 小説

4-1. 門井慶喜『小説あります』

『おさがしの本は・・・』で、図書館のレファレンスサービスと、地方自治体の財政状況から、図書館が閉鎖の危機をむかえ、市議会の文教常任委員会で図書館職員が参考人として発言する、というストーリーを描いた、門井慶喜の『小説あります』が刊行された。¹⁾

小説家「徳丸敬生」の自宅を改装してつくられた N 市文学館に、囑託として勤める老松郁太は、存在するはずのない、徳丸のサイン入り「遺稿集」を手がかりに、廃館が決定的となった、文学館の存続を図ろうとする。同じ N 市に勤務する職員として、『おさがしの本は・・・』で図書館に勤めていた和久山が登場、「N 市 総務課 企画グループ 和久山隆彦」(p.69) の名刺を郁太に提示し、『私も、二年前まで N 市立図書館のレファレンス・カウ

ターに勤務していました』『利用者からの相談に応じて本をさがしたり、その他の資料を紹介したりする仕事です』(p.71)と発言する。

和久山は、「救国の英雄」であり、「二年前、財政の逼迫を理由に、N 市立図書館があやうく廃館の憂き目に遭おうとしたとき、この人は内部の職員の身でありながら、公然と反対論をとねえた」館長に逆らい、市議会の文教常任委員会で演説した「おかげで情勢が劇的に変わり、その結果、図書館は、(廃館をまぬかれたとか)」「N 市立図書館はこんにちも変わらず業務をつづけている。予算を削られたという話も聞かない。そう、和久山は図書館を救った英雄なのだ」(p.72)と紹介される。

老松郁太は、文学館の閉鎖にあたって、「遺稿集」にちなんだイベントを企画するが、その開催にあたって、和久山は便宜を図ってくれる。「『本来なら、閉館直後にこのような催しに使うのは N 市の制度上不可能』『不可能を和久山さんは可能にしてくださった』」(p.291)と、行政内部での調整をこころみ、市長にもあたってくれたことに、礼を述べている。

4-2. 鈴木智之『オフフェルトリウム』

「第 6 回ちよだ文学賞」を受賞した作品で、作者は、「1967 年東京生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。図書館員。京都府在住」(p.10)と紹介されている。2)

図書館員が書いた、文学賞受賞作品ということで、話題になったが、登場人物の職場として、「この図書館に勤め始めたばかりの頃は、館内を歩きながら感じるほの暗い寂しさを愛していた」「国内最大の書庫に好きな時に立ち入ることができる自分を、心から幸運に思った」「十七階建てのコンクリートの箱の中央に佇んで、古びた紙の匂い、手垢に汚れたページの隙間から立ち上がる、甘酸っぱい獣の仔のような匂いを嗅ぎながら、巨大な鯨の腹の中に一人いる感覚を、その静けさを、確かに楽しんでいた。今はもう跡形もない楽しみだった。書庫に入らなければならなくなるたびに、男は怖れるようになった。何十分の間、目指す書物も出口も見失い、途方に暮れ、迷い、当惑した」「どれほど大きな書庫であれ、本の一冊ごとに与えられた請求記号をたどっていけば、目指す書物にたどりつくのは造作もないはずだ。しかもその請求記号を振り当てたのは、他ならない男自身だった。それなのに、いったん書庫に入れば排架のルールをきれいに忘れ、来た道程をたどり直すことすらできなかった」といった、大規模な図書館の状況が描写されているシーンが含まれている。また、その業務については、「男の仕事は書物を分類することだった。日に百二十冊の本を手にとって斜め読みしながら、十進分類法が指し示す記号をあてがっていく。好きな仕事だった」「だが今の男には、退職する直前と同じように、一冊の本がかたちづくるコンテクストが見えなくなってしまっていた」(pp.22-23)という記述になっている。

4-3. はやみねかおる『都会(まち)のトム&ソーヤ^⑨ 前夜祭(EVE) 内人side』

4-3-1. 『都会のトム&ソーヤ』の概要

『都会のトム&ソーヤ』のソフトカバー単行本の帯には、「活字力全開(フルパワー)の人気シリーズ」「90 万部突破の超人気シリーズ、最新作!」とあり、シリーズとして、2012

年2月までに、1～10巻、と『都会のトム&ソーヤ 完全ガイド』が刊行されている。3)

9巻の表紙(イラスト)には、主要な登場人物であり、町立図書館で職場体験学習を行う内藤内人が、エプロンをして図書(12冊)を抱えているが、最上部は崩れようとしている、という場面が描かれている。

4-3-2. 学校の図書室と「司書の横山先生」

物語の冒頭で、中学二年生の内藤内人は、学校の図書室で、本の「貸し出しカード」に「誰の名前も書かれていない」という、だれも興味をしめしそうにない本と、ノート・ペンケースを机におき、居眠りをしていたところを友人に起こされ、「きのうまでの二日間、ぼくがどこで職場体験学習をしたかと思ってるんだ? 町立図書館だぞ、そんなぼくが、図書室を仮眠施設とまちがえるわけないだろ」(p.23)とうそぶく。この図書室は「実力テストにむけて勉強する連中で、図書室は大人気」(p.30)だが、内人は「図書室への出入り禁止になるわけにはいかない。なんてたって、ここは居眠りするのには最高だもんね」(p.32)と感じている。

「わが校の図書はバーコードで管理されているのだが、同時に古き時代の貸し出しカードも、そのまま使っている。これは、司書の横山先生の趣味だ」(p.25)というところに名前がでてくる、「司書の横山先生」については、31ページにイラスト(小太りの初老男性)が描かれている。「町立図書館の館長を定年で辞めて、半年前から週二回、わが校にきてくれている」「小太りで温和。やさしそうなおじいちゃんのイメージなんだけど、図書室の運営になると、とてもきびしい」と、紹介されている。さらに「図書室をおしゃべりの場にしていた女子グループや、カードゲームの遊技場にしていた男子グループは一扫された」「横山先生は、学校のセキュリティシステムを利用して、図書室の本を勝手に持ちだせないようにした」「貸し出しのとき、本にはあってある防犯タグをカウンターで解除してもらおう。もし解除してない本を持って出入り口のゲートを通れば、タグからでる電波に反応してゲートのアラームが鳴る」(p.31)という。

職場体験先の町立図書館の職員で「六十歳をこえてる」(p.77)小室さんは、現在の町立図書館長である岸井さんと比較して、ふたりとも本好きだが本の管理は岸井館長のほうがきびしい、「『横山さんは、本自体が好きなのかな。理系出身の人なんだけど、休日も古本屋や新刊書店へ行って、本を買いあさってるっていう話だ。家の中も本でいっぱい。結婚もせずに、本にかこまれて暮らしてる。本を勝手に持ちだす連中にもきびしかった』監視カメラや万引き防止のシステムをいれ、それがあると、気持ちよく利用できないという意見は無視した、(p.94)と語っている。

4-3-3. 職場体験学習と町立図書館

「ぼくら中学二年生にとって最大の行事ともいえる職場体験学習」は「学校をでて、商店や役場などで勤労体験すること」で、内藤内人は「学校をはなれられるところがうれしい。自由度の高い社会見学って感じがする」と、感じている。「わが校は、ある週の月曜日から日曜日までを『職場体験学習週間』として設定し」「希望する職場体験先と相談して、

二日間だけ勤労体験をさせてもらう」(pp.38-40) ことになっている。

内人は、職場体験学習を、クラスメイトの堀越美晴と、いっしょの職場でできればいいと思っていたが、ある友人から、町立図書館へいけ、というアドバイスをうけ (p.62)、ほかの生徒がこないように、数年前、職場体験で町立図書館にいった生徒が事故で死んだ、いまでもその生徒が本を整理したり、そうじをしにあらわれる、という怪談話を流布させる (p.66)。その効果か、ほかに町立図書館を希望する生徒はいない。

図書館から連絡があり、「職場体験学習週間がはじまった最初の二日——月曜日と火曜日。勤務時間は九時から五時まで」「服装は学生服。図書の整理をするときなどは、エプロンをつける」ことになる。内藤内人は、自転車で図書館の前に着き、「小さな二階建ての図書館。木造の建物は、あたたかい感じをあたえる」(pp.75-76) と思った。

館長のあいさつのあと、内人は、外回りのそうじをするように、チリトリと竹ぼうき、をわたされる (p.78)。おわたたら図書館の中に入って、「書籍の整頓」、このとき、手を洗わなかったことを岸井館長に注意される (pp.80-82)。「お昼からも、書架の整理」で、すべておわたしたのは四時半。一日目の体験学習終了まで、残り三十分というところだった」(p.99)。また、「外回りのそうじ」(p.102) をしたあと、『お疲れさまでした』という岸井館長の言葉と、『職場体験学習日誌』に判子をもらう」(p.103)。

二日目は、雨。岸井館長の話聞いて、「カップを着て外回りのそうじ」(p.129) をしたあと、「ぼくと堀越美晴は、作業部屋で、装備について」説明を聞くが、内人は、岸井館長から『書庫へ行って本の整理をお願いします』『あなたには力仕事むいてるようになります』(p.131) といわれてしまう。

書庫に入って、内藤内人は、ため息をつき、「本であふれかえった書庫。どこから手をつけていいかわからない状況だ」(p.132) と感じる。すべての本を廊下にだして、分類しながら中にいれようと思い、廊下と書庫を往復するが、本は重く、「太ももとひざがガクガクしてきて、体が動かなくなってきた」「持っていた本が落ちそうになり、本のバランスがくずれ。本の山に、体がぶつか」って、本の山の下のほうがつぶれ、「百科事典や画集の箱が、本の山の下でペシャンコになってい」(pp.134-135) た。「けっきょく、あるていどのかたづけがおわって休憩室に入ったのは、三時ごろだった」(p.138)。

「そのあとは、堀越美晴とカウンター業務」で「学校がおわった小学生や、保育園帰りの親子連れがきて、けっこういそがしく、「堀越美晴が貸し出しの仕方を、ていねいに教えてくれ」た。おばあさんがキャンディをくれたり、「無愛想な顔をした小学生が、『どうぞ』と本をわたすと、うれしそうな笑顔になったり——」「利用してくれる人が笑顔になってくれると、ほんとにうれしい！」(pp143-144) と内人は、感じた。

結局、内藤内人は、町立図書館の職場体験学習で、一日目・二日目とも、外回りのそうじと、図書館内の書架整理・書庫の整理がほとんどで、二日目の最後の二時間に、堀越美晴といっしょにカウンター業務を体験している。

4-3-4. 町立図書館の人びと

①館長の岸井涼子さん

館長は「年齢は四十代後半」「度のきつそうな眼鏡をかけているので、表情がよくわからず、内藤内人は、「こわかった保育園の園長先生を思い出した」(p.77)。職員の小室さんは、次のようにいっている。『岸井館長は、きちんと本を管理することが好きなんだろうな。本が盗られても、残ってる本がきちんとならんでたらへいきな人だ。家においてある本もデータベースで管理してるってうわさだ。本は、読むよりも、美しくならべるのが好きってタイプかな』(p.94)。岸井館長は、一日目の最初と最後に、実習する中学生二人に、ことばをかけ、『職場体験学習日誌』に判子をおしている (p.103)。

二日目、「装備」について、実習する二人に、『まず、蔵書ラベルを、バーコードプリンターで打ちだします』岸井館長が手順を説明してくれる。『打ちだしたラベルと返却期限票、ブックポケットを、決まった位置にはります』とあって、実際に、やってみせる。内人は、「かんたんそうに見えるけど、ゆがまないようにはるのは、ありむずかしそうだ」と感じる。『あとは小口印をおし、印刷した背ラベルをはります。最後にフィルマーをかけておわりです』フィルマーをかけるというのは、本が傷んだり汚れたりしないよう、ビニールでコーティングすることだと説明されるが、内人は、このあと、館長から『書庫へ行って本の整理をお願いします』といわれる。『書庫の管理は小室さんの担当なんですが、あまり熱心じゃないようで……』こまったもんだというように、館長が溜め息をつく。ぼくも、ため息をつく」(pp.130-132)。

さいごに『たった二日でしたが、お疲れさまでした』岸井館長が、ぼくと堀越美晴にいい、仕事は楽しかったかきかれて、堀越美晴は笑顔でうなずくが、内人は「複雑な笑顔を、岸井館長にむける」。館長は、最後に、将来、図書館で働くことはなくとも、『ここでの体験をなにかに役立ててもらえばうれしいです』(pp.146-147)と語る。

②倉田さん

「まだ二十代だろう。図書館よりテニスコートのほうが似合うスポーツマンタイプ」(p.77)にみえる男の人、名札には「倉田徹」と書かれている。一日目、内人は、他の職員の小室さんの指示をうけているので、倉田さんとかかわることはないが、「堀越美晴が、倉田さんと楽しそうにテーブルやいすのぞうきんがけをしている」(p.82)「カウンターの中を見ると、堀越美晴と倉田さんが、貸し出しや返却の業務をしている」(p.86)といった場面がある。最後には、倉田さんは、実は、堀越美晴の「お母さんの弟」「叔父さん」(p.150)であったことがあかされる。

二日目、内藤内人が、カウンター業務をしていると『図書館のくせに、おいてないのかよ！』さがしてた本がなかった若い男の人には、文句をいわれた』『図書館には、どんな本でもおいてあると思ったら、大まちがいだ！』とあってやりたかったが、内人は、『申しわけありません』と頭をさげていた「倉田さんが『うちにはありませんが、となり町の図書館においてありました。とりよせることもできますが、いかがいたしましょう？』ていねいに対応すると、若い男の人は、『ああ、そうなんですか。ぜひ、お願いします』頭を

さげた」倉田さんは、内人に、『お客さまの文句に、いいかえさなかったのは、えらかったね。でも、頭をさげるまえに、できることをしなきゃ』、といて「ILL（図書館間相互貸借）という制度を教えてくれた。自分のところにはない本や資料を、ほかの図書館からとりよせたり、ぎゃくにほかの図書館から申しこまれたりする制度だ。『内藤君はILLを知らなかったのだからむりないけど、ぼくらは図書館員。本をさがしてるお客さまのために、最後までできることをやるべきなんだ』と語る。内藤内人は、「倉田さんはプロだ」「尊敬できる」（pp.145-146）と感じた。

③小室さん

「六十歳をこえてる」「小柄な人。髪の毛がだいぶ不自由」な「小室富雄」という男の人が、館長の指示で、内藤内人に、業務を教えることになる。

外回りのそうじをしながら、小室さんに、将来、図書館で働きたいのか聞かれ、内人が、まだ、きめてません、という、と、『もし、図書館の仕事をしたいのなら、やめたほうがいいよ。すくなくとも、男が必死でやるような仕事じゃない』といい、自分は、小さな運送会社を経営してたが、規制緩和と不況の影響でつぶれ、女房も子どもをつれてでていって、『ようやく、臨時で図書館に仕事を見つけたが、じつにつまらん仕事だ』（p.79）といっている。

小室さんに、返却本の整頓をするようにいわれて、内人がどうしたらいいのか尋ねると、『本の蔵書ラベルを見て、それぞれのところにもどすんだ。かんたんだろ』『わしのよようなプロになると、返却作業と同時に、書架の整理もできるんだ』『返却本を書架にもどすとき、一瞬、棚にならんだ本をみるんだ。そして、五十音順がまちがっていたり、分類番号がちがってる本があったら直すわけだ』といて得意がり、内人は「すこしだけ見直した」が、『まあ、ド素人の内藤くん、そんなことはできっこない。とりあえず、返却本だけ確実にもどしてくれたら、合格だ』といわれ、「バカにしたような言い方、やっぱり、いやなおじさんだ」（pp.81-82）と思う。

「開館してからは、書架の整理」を、日本十進分類法で、小室さんが0から8、内人が9、と、割り振りをする。内人の分担が少なすぎると思ったが、9の「文学」の本はたくさんあって、こまかく分かれている。「泣き出したい気分、一冊ずつ背表紙をチェックする。だんだん五十音がわからなくなってくる」「図書館でいちばん利用されるのは文学の書架だ」「当然、文学の書架を整理するほうが時間がかかる」そこまでわかって担当させたのか、と怒りが湧いてくる（pp.84-87）。「940」のドイツ文学まで整理して、残りは昼ごはんをすませてからとする。「小室さんも、さりげなく手助けしてくれてた」「ぼくが整理し終わった棚を見て、まちがってた本があると」「直してくれる」「きっと、悪い人じゃない……たぶん」（pp.89-90）と、内人は思った。

二時近くなってしまった、昼食休憩中、小室さんに『どうだ、図書館の仕事は？ おもしろいか？』『正直にいえよ。退屈でめんどろ？』ときかれ、内人が『……いえ、まだなれてないけど、仕事をおぼえたら、余裕ができて楽しくなるとおもいます』という、

『男がちまちまと本の整理をして、楽しいはずないだろ』と、小室さんは、財布から、派手なデコトラで日本じゅうを走りまわったころの写真をとりだして、内人にみせ、『わしには、図書館の仕事は向いてないんだな。こういうのは、岸井館長や、去年辞めた前の館長みたいに、本好きの人間じゃないと……』(pp.91-93) といっている。

二日目、書庫の管理は小室さんの担当だが、「あまり熱心じゃない」といっていた館長から、書庫の本を整理するようにいわれた、内藤内人が、「あるていどのかたづけがおわって休憩室に入った」「三時ごろ」、小室さんが、はなしかけてくる。『今日で職場体験はおわるんだろ?』『はい』『わしは、おわらない。あしたも、そのつぎも、ずっと本を相手にウロウロしてるんだ』ため息をつく小室さん」内人は、腹が立って『そんなにいやなら、図書館を辞めたらどうですか?』という、『この不景気、辞めたら、次の仕事があるかどうか分からない。意にそわない仕事でも、あるだけで感謝しなきゃな』という小室さんに、内人は『本、好きじゃないんですか』ときくと『ああ』『これほど図書館員に向いてないやつもないだろ?』という。内人は、『べつに、本が好きじゃなくとも、図書館の仕事は楽しいと思います』『本が好きじゃなくても、図書館を利用する人が喜んでくれたら、うれしいじゃないですか』『仕事を楽しくするのもつまらなくするのも、本人しだいじゃないんですか?』』といってしまう。「いいかったことは、みんないえた。これだけ好きなことがいえるのも、ぼくが社会人じゃないから あしたからもう会わなくていいんだもん。あ〜すっきりした」と、内人は感じた (pp141-143)。

一日目が終わったとき、小室さんは、内人を飲みにいこうと誘って、館長に注意される (p.105) が、最後は、『内藤くん。こんど会ったとき、わしは、きみがいっしょに酒を飲もうと思ってくれるような男になるよ』そういう小室さんは、なんだか生き生きしていた」内人が『がんばってください』という、Vサインをだした (p.153)。

④同じ日程で体験する堀越美晴

一日目がおわったとき、堀越美晴は内藤内人に、今日一日、楽しかった、『みんな、とってもいねいに教えてくれるから、すごくらだったわ』『図書館にきてよかったわ。絵本を借りる小さい子が、「お姉ちゃん、ありがとう」っていつてくれたとき、なみだがでそうになったの』という (p.104)。二日目の最後にも、館長に、仕事は楽しかったかきかれ、堀越美晴は笑顔でうなづく (p.146)。

⑤職員に対する、内藤内人の感覚

町立図書館の各職員について、内藤内人がどのように感じたかは、それぞれのところに記したが、実習が終わった時点では「ぼくの頭の中を、二日間の出来事が通りすぎる。うれしそうに本を借りていく子どもたち。整理して、きれいになった書架。楽しそうに仕事をする堀越美晴。いっぼう、ぐちゃぐちゃの書庫や、働こうとしない小室さん」「ぼくは、複雑な笑顔を、岸井館長にむける。『とても勉強になりました』」(p.147)。ただし、内人は、二日目に書庫で、「小室さんが働き者の図書館員だったら、この二日間は、ずいぶんちがったものになってたんじゃないだろうか」(p.132) と思っているのだが…。

5. エッセイ

5-1. 「図書館に通う」(月刊誌『みすず』連載)

エッセイ「図書館に通う」は、月刊誌『みすず』に、2010年3月から、不定期(ほぼ隔月)に掲載されている。その著者、宮田昇は、内田庶・名義での翻訳もあり、翻訳や著作権関係の領域で、多大な業績を残してきている人物である。1)

2012年2月の時点で、「図書館に通う」は、9回掲載され、冒頭「図書館にはさまざまお世話になった」からはじまり、長年の翻訳・著作権関係の業務においてかかわりをもった、国立国会図書館や海外の図書館、最近の公共図書館利用体験、また、出版関連業界と図書館の関係についての提言など、多様な内容が含まれている。なお、このエッセイについては、2012年4月の日本図書館研究会研究例会で発表に取り上げるほか、別に、稿を改めて、論考を発表する予定にしている。2)

6. おわりに

ここでとりあげたコミックの2作品は、その制作プロセスで、図書館関係方面への取材をおこなったことが記されている。『夜明けの図書館』の、「レファレンスマンガへの道」(p.48)では、図書館のカウンタで「レファレンスについて調べたいんですが」と質問して、職員に図書館学の書架へ案内されたこと、「単行本への道」(p.136)では「レファレンス講座へ参加したり」「司書さんを質問攻めにしたり」したということが、示されている。『図書館の主』2巻の巻末には、「取材協力」として、「千代田区立千代田図書館」「国立国会図書館国際子ども図書館」、の名前があげられている。そのため、結果的に、図書館員が、共感できるようなストーリー展開になっているところがある。

『都会のトム&ソーヤ』では、職員の現実がデフォルメされている面もあるが、管理優先の発想をする館長(「司書の横山先生」「岸井館長」)、専門職員(「倉田さん」)、モチベーションの低い臨時職員「小室さん」といった、多様な職員の状況が、中学生の視点から描かれている。また、「職場体験学習の実際」「NDC」「図書の装備」「ILL(図書館間相互貸借)」などについては、実態をふまえた記述となっている。

『図書館の主』の「書店と図書館」では、結果的に、図書館がわの主張に、書店関係者もある程度、納得するというストーリーになっているが、現実は、必ずしもそうでない。たとえば、新潮社の石井昂(常務取締役)は、「私は10年ほど前から公立図書館が“無料貸本屋状態”にあることへの問題提起をしてきた」「当時、私も図書館問題に関するシンポジウムに出版社のひとりとして、出席させていただいたことが何度かある」「持論を述べると図書館サイドの方々から集中砲火を浴びた」「『民主主義のために「タマゴ」をたくさん無料で配ってください。それで「鶏」が死んでもいいんですね』最後はそういわざるをえなかった」と、2011年末に、述べている。少なくとも、大手文芸出版社の経営者が、公共図書館の貸出に対する危機感を、依然として強くもっていることは明らかであろう。ま

た、自ら、多数の著書を執筆し、日本ペンクラブ理事でもある、猪瀬直樹東京都副知事は、「ベストセラーを複数購入する図書館のあり方には、『書店の民業を圧迫している』と語っている。2)

今回は、紙幅の都合で、詳しくふれることができなかったが、宮田昇「図書館に通う」は、出版関連業界と図書館の今後のあり方について、示唆に富んだ内容が含まれており、稿を改めて、検討する予定にしている。

注

1. はじめに

1) 和合亮一『詩の礫 (つぶて)』2011.6、徳間書店、p.179

この部分は、「2011年4月1日 23:10」の投稿となっている。

なお、東北大学図書館長、野家啓一は、この一節を紹介し「おそらく詩人の勤務先である高校の図書館のことかと思われる」と述べている。出典は、次のとおり。

野家啓一「大震災のなかの図書館」『MARUZEN LIBRARY NEWS (丸善ライブラリーニュース)』第15号 (通巻166号) p.1

2. 映像メディア

2-1. 映画『コクリコ坂から』

1)高橋千鶴、原作：佐山哲郎『コクリコ坂から』角川書店、2010

初出：『なかよし』講談社、1980年1月号～8月号

2)スタジオジブリの中心人物で、映画の「企画」にクレジットされている宮崎駿は、『脚本コクリコ坂から』の冒頭で、「1980年頃『なかよし』に連載され不発に終わった作品である(その意味で『耳をすませば』に似ている)」(p.7)「マンガ的に展開する必要はない」(p.12)と述べている。出典は、次のとおり。

宮崎駿「企画のための覚書『コクリコ坂から』について 『港の見える丘』『脚本 コクリコ坂から』角川文庫、2011、pp.7-13

3)さらに、山口は「<ブックカードを通じた出会い>という設定に変更はなかったが、アニメーションの中では」バーコードが導入されること、「学校図書館のシーンもブックカードが登場しないようにアレンジされている」こと、を指摘している。出典は、次のとおり。

山口真也『『コクリコ坂から』の学校図書館—ブックカードにあの人の名前 図書館ノート10』『みんなの図書館』NO.416、2011,12、pp39-43

この中で、山口は、「私がこれまで地道に集めてきた『図書館が出てくる漫画』は 2,500作品もあって、ブックカードをめぐるエピソードはこのほかにもたくさんの作品に描かれている。その中には、プライバシー保護のあり方や『図書館の自由』について改めて考えさせられるものもある」(p.43)と述べている。

筆者（佐藤）は、かつて、スタジオジブリ作品と図書館の関係について、『耳をすませば』について、詳細に検討した、二村重和『生成するフラクタル 「耳をすませば」考』で「聖司が貸出カードから『雫』の名前を発見すること、雫が貸出カードから『聖司』の名前を発見すること、そのどちらも『現実にはありえない』ことだったのだ」（pp.288-289）と結論付けていることに対して、『図書館の自由に関する宣言』の社会的認知状況や、学校図書館の職員配置の点から、「学校図書館では、カードのエピソードは封印し、市立図書館で「貸出カードから名前を発見する」ストーリーになっていることこそが、原作とは異なる、映画に特有の『現実にはありえない』『設定』なのである」と指摘したことがある。出典は、次のとおり。

佐藤毅彦『『学習の場』としての図書館は、どうみられてきたか—学校図書館と『耳をすませば』をめぐる論議の再考、とその周辺』『生涯学習時代における学校図書館パワー 渡辺信一先生古稀記念論文集』渡辺信一先生古稀記念論文集刊行会・発行、日本図書館協会・発売、2005、pp.97-117

二村重和『生成するフラクタル 「耳をすませば」考』新風舎、2004

2-2. テレビドラマ『破婚の条件』

4)脚本は、岡崎由紀子。視聴率は、13.2%（ビデオリサーチ 関東）。

このドラマについては、下記の冒頭「はじめに」の部分で、言及している。

佐藤毅彦「ライター出身作家の描く図書館 北森鴻のケースについて——図書館はどうみられてきたか・12」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.48、2012、pp.1-12

2-3. テレビドラマ『ストロベリーナイト』

5)『ストロベリーナイト』は、フジテレビ系列で、2012年1月～3月、火曜夜に放映された、竹内結子主演の警察ドラマ。実際に放映されたのは2012年になってからだが、企画・脚本等が検討・制作されたのは、2011年であったと考えられるため、ここでとりあげた。

「過ぎた正義（前編）」の脚本は、旺季志ずか。視聴率は、16.3%（ビデオリサーチ 関東）。

なお、「過ぎた正義（前編）」の放映直後には、「図書館サービス計画研究所」の掲示板に、このドラマに関する、複数の書き込みがあった。

6)誉田哲也「過ぎた正義」『シンメトリー』光文社文庫、2011、pp.51-94←光文社、2008

文庫本巻末の〈初出〉では、「過ぎた正義」『小説宝石』2004年10月号、となっている。

7)「ミステリに関連する小説、漫画、ドラマ、その他もろもろについて批評や感想を述べるブログです。」という「ミステリ通信 創刊号」では、この回について「ただ、気になるのは」「図書館で吾妻の貸出履歴を入手していたこと。『図書館の自由に関する宣言』で貸出履歴は保護されていたような……捜査機関でも入手は難しかった筈。たしか、ドラマ『相棒』でも同様の理由で欠番となった作品があったと記憶しています」と記されている。

(<http://mysterytuusinn.seesaa.net/article/248314632.html>)

3. コミック

3-1 『夜明けの図書館』

1) 埜納タオ『夜明けの図書館』双葉社、2011.10

2) ヤマダトモコ「ブックサイト 『もの』としての本考える マンガ 『草子ブックガイド』など」『神戸新聞』2011.11.13、p13

この記事の中では、「『本』に関するお薦めマンガとして」以下の作品をあげている。

玉川重機『草子ブックガイド』講談社、2011

久世番子『番線』新書館、2008

3) 松本雅貴（市川市立図書館館長）「新刊情報担当委員が選ぶ おすすめ新刊書『夜明けの図書館』」『あうる』No.104、2011.12+2012.1、p.54

4) 「E1252ーマンガ『夜明けの図書館』の作者・埜納タオさんインタビュー」『カレントアウェアネス - E』No.207、2011.12.22

(<http://current.ndl.go.jp/e1252>)

5) 門井慶喜『おさがしの本は・・・』光文社、2009

季刊誌『ジャーロ』に「レファレンスカウンターの難問」というタイトルで連載（2007秋～2009冬）、『おさがしの本は・・・』と改題されて、単行本が刊行された。「レファレンス」ということばが、一般的でないと思われたのか、単行本では、タイトルが変更されている。

この小説における図書館の描かれ方については、以下であつまっている。

佐藤毅彦「図書館法改正と『メディアの中の図書館のイメージ』 法改正の年に文学作品に描かれた図書館は？ 事例研究「レファレンス・カウンターの難問」を中心に 図書館はどうみられてきたか・10」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.45、2008、pp.1-13

6) 増川弘造の年齢については、同僚議員の、「香坂貴子」「二十七歳の女性議員」（p.213）に対して、「三十も年上の先輩」（p.214）との記述があることから、五十代後半から、六十歳前後であると思われる。

7) 前述した「カレントアウェアネス」でのインタビューで、埜納タオは、「2012年春頃よりシリーズ連載を予定しています」と述べている。

8) 文部科学省『これからの図書館像—地域を支える情報拠点をめざして—（報告）』（2006）では、「第2章 提言 これからの図書館の在り方」で「2. これからの図書館サービスに求められる新たな視点」として、「(2) レファレンスサービスの充実と利用促進」「(3) 課題解決支援機能の充実」をあげている。(3)の例として「行政支援、学校教育支援、ビジネス（地場産業）支援、子育て支援等が考えられる」としている。また、「(7) 他の図書館や関係機関との連携・協力」では、「②行政部局、各種団体・機関との連携・協力」として、「様々な行政部局と連携し、行政を支援していくことにより、行政事務や政策立案の効率化を図ることができる」とされている。

9) 篠原ウミハル『図書館の主1』芳文社、2011

篠原ウミハル『図書館の主2』芳文社、2012

単行本1巻巻末には『図書館の主』用語集「図書館通信」として「作中に出て来た作家名、図書館用語、などを簡単にですが説明させていただきます」というページが設けられている。そこでは「アーサー・ランサム」「江戸川乱歩」「オスカー・ワイルド」「司書」「書架」「千夜一夜」「宝島」「太宰治」「寺村輝夫」「夏目漱石」「新美南吉」「ひげよさらば」「フェアブル昆虫記」「冒険者たち」「ホビットの冒険」「指輪物語」「レファレンス」「ロビンソン・クルーソー」がとりあげられ、それぞれ、数十字程度の説明がなされている。

単行本2巻巻末には、同様の体裁で「赤毛のアン」「あしながおじさん」「おおきなかぶ」「加古里子(かこさとし)」「クリスマス・キャロル」「ぐりとぐら」「書誌データ」「少年倶楽部」「高垣眸」「チャールズ・ディケンズ」「手袋を買いに」「不思議の国のアリス」「宮沢賢治」「ルイス・キャロル」「若草物語」について、解説されている。こちらの巻には、「取材協力」として、千代田区立千代田図書館、国立国会図書館国際子ども図書館、の名前があげられている。

10)1巻の最終話で、御子柴は「3年くらい前」には、児童図書館のオーナーが「よく行く図書館で」「新米の司書として」「働いていた」(1巻 p.164)ことが、示されている。

11)1巻 p.56 中段右、同 p.64 上段右、のコマに図書館の入口付近が描かれており、「市立図書館」と、表示されている。

12)1巻 p.180 下段右、のコマに図書館の入口付近が描かれており、「市立図書○」と、表示されている(最後の文字はコマが切れて確認できない)。

4. 小説

4-1. 『小説あります』

1)門井慶喜『小説あります』光文社、2011

門井慶喜『おさがしの本は・・・』光文社、2009

『おさがしの本は・・・』『小説あります』の「見返し」部分には、図書館で使用されているブックカードを模したデザインのカードが描かれている。上部にタイトル、その下には、返却期日を押印するためのスペース(『おさがしの本は・・・』では、「09.7」、『小説あります』では、「11.7」、というその図書の初版年月を表わす数字が記載されている)がとられ、最下段に「必ず期限を守りましょう。」という記述とともに、出版社である「Kobunsha」の名称が記されている。

4-2. 「オッフェルトリウム」

2)鈴木智之「オッフェルトリウム」『第6回ちよだ文学賞』千代田区区民生活部文化スポーツ課、2011、pp.10-49

同書の巻頭で、「ちよだ文学賞」とは、「句の持つ文化的・歴史的な魅力をアピールするとともに、文学の担い手として、新たな才能を発掘するために『ちよだ文学賞』を実施しています」(p.2)と、述べられている。

「YOMIURI ONLINE」では、「京都府精華町の鈴木智之さん」とある

(<http://www.yomiuri.co.jp/book/news/20111031-OYT8T00232.htm>)。web では「国立国会図書館関西館勤務」としているものもある(<http://d.hatena.ne.jp/jyunku/20111025/p1>)。

4-3. 『都会 (まち) のトム&ソーヤ⑨ 前夜祭 (EVE) 内人 s i d e』

3)はやみねかおる『都会 (まち) のトム&ソーヤ⑨ 前夜祭 (EVE) 内人 s i d e』講談社、2011

『はやみねな日々2/15』では、「この 10 巻目で 100 万部だそうです」との記述が見られる。出典は、次のとおり。

(<http://park.wakwak.com/~hayamine/kaoru.html>)

なお『都会のトム&ソーヤ』については、「上伊那の高校生による読書大賞」に選定されたとの報道があった。出典は、次のとおり。

「今年は『都会のトム&ソーヤ』上伊那・高校生の選ぶ読書大賞/長野県」

(<http://database.asahi.com/library2/main/start.php>)

はやみねかおる『怪盗道化師』講談社、1989、で「第 30 回講談社児童文学新人賞」佳作入選。2012 年の時点で、同賞選考委員 (5 名) の一人である。

はやみねかおる原作・えぬえけい漫画『名探偵夢清志郎事件ノート』は、「第 33 回講談社漫画賞」(2009) を受賞している。

5. エッセイ

5-1. 「図書館に通う」(雑誌『みすず』連載)

1)みすず書房ホームページの「著訳者一覧」では、「宮田昇」について、以下のように、記述されている。

1928 年東京に生まれる。早川書房編集部、チャールズ・E・タトル商会著作権部を経て、1967 年、日本ユニ・エージェンシー創設、元代表取締役。1991 年、日本ユニ著作権センター創設、元代表理事。(<http://www.msz.co.jp/book/author/15052.html>)

内田庶「『探偵小説』への偏見」『少年少女 昭和ミステリ美術館 表紙で見るジュニア・ミステリの世界』平凡社、2011、pp126-127、では、次のように、述べている。

団地の新設小学校の PTA 会長に選ばれ、学校図書室を見学した際、「『少年少女推理文学全集』(あかね書房)の表紙の裏側に貼られた利用カード」に「何十となく貸出日の印が押されていた」「図書館でいかにミステリーが読まれているかについて」新聞書評等で取り上げられている創作と翻訳の児童文学の利用カードは、四、五人の利用しかなかった。

「私が企画し、自身も一冊翻訳したイギリスの幼年向けミステリー、エニード・ブライトンの『五人と一ぴきたんてい団』(実業之日本社)」などを例に「英米では小さな子どもの時から探偵小説に親しんでいることを熱っぽく話した」と記している。

「五人と一ぴき」は、NHK で、1969.4~1971.9 に、放映されたドラマのタイトルだが、原作は、「<五人と一ぴき>たんてい団」(表紙の記述)シリーズ「初版」として、実業之日本社、より、1964~1965、に、全 8 巻、が刊行されていた。その後、「NHK の TV シ

リーズにあわせて」（『少年少女 昭和ミステリ美術館 表紙で見るジュニア・ミステリの世界』平凡社、2011、pp121、の記述）「新装版」（こちらの表紙は「五人と一ぴき」と記述）が、同社より、1969～1970、に、全8巻、で刊行された。それから30年以上経過し、同社より、再編集されたものが、2002～2003、に、『五人と一匹Ⅰ ミルトン屋敷の謎』『五人と一匹Ⅱ 首飾りのゆくえ』『五人と一匹Ⅲ 見えない犯人』の、全3巻、で刊行（こちらでは「五人と一匹」と記述）されている。

このシリーズの「初版」「新装版」の書影は、『少年少女 昭和ミステリ美術館 表紙で見るジュニア・ミステリの世界』平凡社、2011、pp121、に掲載されている。

2)日本図書館研究会 第288回研究例会 「2011年、図書館はどのように言及されたか—『夜明けの図書館』（埜納タオ）、「図書館に通う」（宮田昇）を中心に」において、発表。

日時：2012年4月21日 会場：大阪市立総合生涯学習センター

「例会案内」は、『図書館界』vol.63、no.6、2012.3、に掲載。

「図書館に通う」についての論考は、「図書館はどうみられてきたか・13」として、『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.49、2013、に、投稿を予定している。

6. おわりに

1)石井昂「“自炊”横行は『創造のサイクル崩壊』の危機 書籍スキャン事業者提訴の背景」『新文化』2011.12.22、p.1

2)「猪瀬副都知事、図書館の貸出し主義を批判」『web新文化』
(<http://www.webdoku.jp/shinbunka/2012/02/10/112355.html>)

(文中で、参照したwebページは、2012年2月の時点で公開されていたものです)